

令和5年8月第2回近江八幡市教育委員会定例会（要旨）

1. 開催日時 令和5年8月23日（水） 午前9時30分 ～17時00分

2. 開催場所 近江八幡市文化会館2階会議室2

3. 出席委員

教育長	大喜多 悦子
教育長職務代理者	安倍 映子
委員	西田 佳成
委員	大更 秀尚
委員	圓山 淳子

4. 事務局出席者

教育部長	田村 裕一
教育総務課長	岡村 祥子
教育部次長兼学校教育課長	森 茂次
学校教育課参事	野田 喜紀
教育総務課長補佐	夜野 友昭
教育総務課副主幹	田村 俊幸

5. 会議を傍聴した者 10人

6. 会議次第

【議案】

○議第23号 令和6年度から使用する小学校教科用図書及び令和6年度使用
小中学校特別支援学級教科用図書の採択につき議決を求めること
について

○議第24号 「北里学区の大型分譲地にかかる就学前施設の整備について」の
意見書について（非公開）

7. 議事の経過

(1) 開会（日程確認）

- ・教育長が8月第2回定例会の開会を宣言

- ・出席委員定数の確認
- ・日程について
- ・非公開案件

承認

議案

- 議第24号 「北里学区の大型分譲地にかかる就学前施設の整備について」の意見書について

(2) 議事

- ◆議第23号 令和6年度から使用する小学校教科用図書及び令和6年度使用小中学校特別支援学級教科用図書の採択につき議決を求めることについて

◎小学校選定教科用図書

○道徳

【事務局説明】

道徳は6社の教科用図書がある。現行は、「日本文教出版」。

調査研究部会からは、「日本文教出版」が推薦され、協議会としても選定された。

光村図書は、1・2年で「道徳が始まるよ」、3年生以上では「道徳の学び方」が示されており、この1時間を除くと34教材しかない。教材数については、日本文教出版が35教材に3教材付録としてついていて、合計38教材、光文書院が40教材と充実している。

どの社の教科書もいじめについては、全ての教科書が重点として取り扱い、複数の教材で学ぶような配列になっている。ただ、日本文教出版以外の5社は、年に1回の重点となるのに対し、日本文教出版の教科書は、人との関わりについて、毎学期、重点として組まれており、年間3回、学ぶことができるように配列されているところがよいと思った。

道徳の授業では、教材の主人公の心情を考えていくので置かれている状況がよく分からないと困る。1年生「かぼちやのつる」は、ミツバチやチョウチョに意見されても、スイカや子犬が困っても、自分勝手に蔓を伸ばしたカボチャが最後にトラックに蔓をひかれてしまうというもの。教育出版は20ページにあるが、お話にはチョウチョが出てこない。東京書籍の78ページ、光文書院の34ページ、学研の16ページでは、吹き出しでお話が進んでいくので、状況が分かりにくい。光村図書の20ページでは、状況が詳しく書かれすぎていて、1年生の子どもたちには、お話が長すぎる。日本文教出版はバランスがとれている。

また、3年生「ふろしき」は、日本文教出版は50ページ、教育出版は22ページ、光村図書は119ページにある。日本文教出版では、すいか包みでスイカを包んでいるが、教育出版ではかぼちやを、光村図書ではキャベツを包んでいる。なぜ、すいか包みでカボチャやキャベツなのか。大きくて持てそうもない丸いス

イカを包んで持てるので子どもたちも風呂敷のよさを感じることができる。東京書籍の4年生の58ページではすいか包みでスイカを包むお話になっているが、日本文教出版の方が、写真が豊富にあり、より風呂敷の便利さや美しさが子どもに伝わる。

道徳の時間、何を学んだのか記録してふり返ることができるようにするためにも、道徳ノートは必要だと考えるが、付録としてついていたのは、日本文教出版だけであった。今回は、中心発問が書かれたノートだったが、今回はそれがなく自由度が増した上、1ページで1授業分となっている日本文教出版のノートはよいと思う。光文書院も別売170円でノートが売られているが、市販のノートより値段が高く、書く事柄が決められているので自由度があまりない。

このようなことから、「日本文教出版」が選定された。

【質 疑】

○安倍委員

説明をいただいて、一目瞭然だと感じた。また、一人で見ている時と違うと感じた。何が、どこに、どのように配分されているのかという違いと自分自身が感じる、慎重に捉えるのを支えてくれる挿入の絵がどこにあるのか、どれくらいの形、大きさ、色であるのか、1年生は特に文章を支えるもの、心を支えるということでは、教科書の中の位置関係にあると感じる。例えば、文章が右で終わっていて、左から始まるということでは、右のことも1年生は見るかもしれない。そうすれば目の中に前の残像が残りながら次のものを見るという教科書の捉え方というのは1年生では難しいと思う。3年生も4年生も同じだと思う。道徳で何を育てるのか、何を学ぶのかというときに、心をどのように育てるのか、この間皆で勉強させていただいた非認知能力を育てるのに一番ふさわしい教科書だと思う。例えば1年生は、教科書に学ぶのか、先生の教材なのか、地域教材なのかというときに、よほどの関係性をもって考えていかなければならない。教科書だけでは近江八幡が文部科学省や滋賀県の研究をずっとやってきた経過の中で大事にしてきたものが、教科書だけにあるとは捉えないでほしいと感じた。私自身はこの中で6年生の教科書に大変心を動かされた。涙なしでは読めない内容があって、子どもたちはこの教材に心触れて自分の生活と重ねながら命を学んでいくのだと思った。現在使用している日本文教出版の教科書にそのことが含まれていたのも、前回皆で選んだことが近江八幡に生きていると思った。先日、道徳の授業を見せていただく機会があった。大型提示装置に大きく映しながら、どのように教育していくのかということも含めて、近江八幡の授業のスタイルのスケールが大きくなってきて、共感できる授業になってきていると感じた。

○圓山委員

社会問題となっている認知症の問題が記載されているのは光村図書のみであった。その内容も、家族間だけで問題を解決するような内容であったが、社会全

体で認知症の方やその家族を支える必要性についても記載があればと良いと感じた。この場での意見を伝えていただけるのであればありがたい。

○大更委員

日本文教出版については3教材が付録で付いているので、大変大きいことであると感じた。道徳の時間は35時間以上にあるので、この付録は大変有効である。ただ、どこの教科書会社についても、学び方が丁寧に書かれている。

○西田委員

各社とも素晴らしい教科書を作られている。各ページにQRコードが掲載されているが、これが何に役立つのかの記載があると良いのではないかと思う。光村図書に関しては、QRコードで音声資料が見られることが記載されているが、他の出版社の教科書にはその部分の記載がない。

○教育長

QRコードの部分に何が見られるのかという記載があるとより効果的だと思うことだが、検定の内容には含まれていないのか。

○学校教育課

外国語についてはQRコードの内容もデジタルコンテンツも検定の中に入っているが、その他の教科については検定には含まれていない。

○圓山委員

補助ツールのQRコードを学校ではどのような使い方をされるのか。また、現在はどのような使われ方をされているのか。

○学校教育課

授業者が事前準備や授業研究の段階で効果的であると判断した場合は使っていくことになる。

○教育長

年間3回自分を見つめる、日本文教出版でははじめの問題を挙げられている。6年生にははじめと法律という形で読物資料の後に解説がある。子どもたちに多角的な面から考えるという部分も補助資料として付いている。道徳は自分を見つめる教科。

【採 決】

小学校選定教科用図書「道徳」は、

日本文教出版「小学道徳 生きる力」(全員賛成) を採択することに決定

○国語

【事務局説明】

「国語」は、3社の教科用図書がある。現行は、「東京書籍」。

調査研究部会からは、「東京書籍」が推薦され、協議会としても選定された。

どの出版社も、体験的・問題解決的な学習や多様な考え方を生かす言語活動へ

の工夫がなされている。

まず始めに、東京書籍の4年生の上下の教科書で、上の2ページ目次をご覧ください。「読む」領域の物語教材として「こわれた千の楽器」、「走れ」、「一つの花」、「ごんぎつね」、「世界一美しいぼくの村」など、多くの教材を取り扱っている。このことから「読む」領域の指導に力点を置いていることがわかる。次に4下の36ページでは、「ごんぎつね」が掲載されているが、見開き2ページを使って、大きな挿絵とともに学習のめあてとして「人物の気持ちの変化を伝え合おう」と書かれている。ここで児童は作品の世界に入り込み、学習のめあてをつかむ。下半分の色がついている部分では、3年生で学習したことを思い出せるようになっている。

また、この単元の学習の流れが図で示されているので、児童と指導者が一緒に学習の流れを確認して読み始めることができる。教育出版と光村図書にも同じようなページがあるが、どちらも教材文の後ろのページにある。

また、東京書籍では、教科書に登場する作品や作者に関連する作品が巻末に掲載されている。例えば、4年生の下110ページに「世界一美しい僕の村」という文学教材がある。同じ作者の作品が巻末134ページにある。5年生では、「注文の多い料理店」を読んだ後に宮沢賢治の伝記、6年生では、「模型のまち」で戦争について考えたあと、同じく戦争について描かれた「ヒロシマのうた」を読むことができる。並行読書をすることは、学びの深まりや広がりにつながる。併せて4年下の132ページでは、デジタル教材の使い方や並行読書の教材、学習で使う言葉や表現の例などが掲載されている。児童の言語活動を深めたいときに参考にでき、社会科や生活科、学級活動などにも活用できる。

戦争や平和をテーマにした教材では東京書籍と光村図書が多く、教育出版は2社と比べて少なくなっている。

また、光村図書の4上の33ページ、東京書籍4上の37ページでは、単元の終わりに振り返りのコーナーがある。学習を振り返るために児童に問いかけがされている。光村図書の「ふりかえろう」では、児童への問いかけの言葉が、東京書籍と比べてやや難しいと感じる。

表現、表記及び資料、図表、写真、さし絵、造本等の工夫について、東京書籍では学習のめあてである「言葉の力」とともに迫力ある写真や挿絵が大きく掲載されており、教材そのものや言語活動に対する児童の興味関心が自然に高まることが期待されている。光村図書については、「読む」教材におけるさし絵の重要性を鑑みたとき、画風や描かれている場面に工夫が必要だと感じる点もあった。

このようなことから、「東京書籍」が選定された。

【質 疑】

○大更委員

どの出版社についても学習の流れや学びについては出てきているが、東京書

籍については、人物の気持ちの変化を想像するという事でどのような見通しをもつのか、学習をどのような流れで進めていくのかということをも最初に、視覚的にもわかりやすく説明されている。今までは最後に記載されているので子どもたちにはその部分を見て、このように確かめようとか、人物の気持ちの変化はどのようなかと戻っていく。物語に浸るばかりではなく、物語を読む中で子どもたちがどのような学びをしていくのか、どのような学びをもって次の学習に活かしていくのかということ考えると、はじめからめあてや先生の意図も含めて、子どもたちがどのような学びをすすめていくのかが明確になっているのですごく良いと思っている。他社についても見通しについては記載されているが、最初ではない。最初にあることで、教える側も学ぶ側もわかりやすいと思う。

○西田委員

東京書籍の教科書の中に「図書館へ行こう」という内容の部分があり、すごくうれしく感じた。「本は友達ですよ」ということや図書館へ行くと色々調べられるということも記載されているので、本市の「早寝・早起・あさ・し・ど・う」にも合致していると感じた。

○安倍委員

小学校に入学するときに、就学前の子どもは一番に算数と国語と言う。その時に算数ってどう思っているのだろう、国語ってどう思っているのだろうと思いながら授業を見に行ったときに、教科書を開くとワッと言う。これは1ページ目を開いたときに何が載っているのかということで、感動があり、そこに学びの意欲がある。だから私は見開きの部分で何を感動させようとしているのか、本に込められた教育の命のようなものを各社の方々がどう思っているのかを考える。例えば、半分で書いている詩と全体を使って書いている詩とではどちらに感動するのか。詩の中で何を感じさせていくのか。まだ少ししか字を習っていない、読み解く力に至っていない子どもたちが、どの言葉で、どの擬態語や擬音語で学んでいくのか。「た」と「と」しか知らないのに何か楽しさが湧いてくるというのが、東京書籍の「上」に入っていた。各学年を見ていくと国語から総合学習への広がりというのを感じた。言葉の成り立ちから、社会の広がりまで記載されていると思うと、国語の教科だけで学ぶのではなく、国語から総合学習に広がりをもって考えていくというこれからのスタイルを感じた。

○教育長

光村図書の「振り返ろう」の「知る、読む、繋ぐ」という部分。ずっと学習してきた後に「振り返ろう」の部分はなかなか難しい問いだと感じる。4年生くらいになると人物の気持ちの変化を捉えるということができる発達段階にあるので、その辺りを考えながら東京書籍は教科書を作っておられると感じた。また、情景描写というののもわかるような発達段階ではあると思うので光村図書はその部分も触れておられるが、1つに絞って読んでいくときに物語文の読み方の大切な部分を、人物の気持ちの変化をとらえて学ぶということを東京書籍はわか

りやすく構成されていると思った。

○安倍委員

詩を読むときには、情景の色などにこだわってしまう。どのようなタッチで描かれているのか。あまりに鮮明なタッチだと押しつけになり、ないと情景のきっかけがない。どのように子どもの心を引き出していくのかが大事だと思う。東京書籍はすごくいいタッチで柔らかい絵だと感じた。

【採 決】

小学校選定教科用図書「国語」は、
東京書籍「新編 新しい国語」（全員賛成） を採択することに決定

○書写

【事務局説明】

「書写」は、3社の教科用図書がある。現行は、「東京書籍」。

調査研究部会からは、「東京書籍」が推薦され、協議会としても選定された。
はじめに、東京書籍の教科書の秀でたところを3点説明する。

1点目は、採択方針の②の観点に関わる部分。例えば、2年の22ページ「おれや曲がり」、「始筆や終筆のやり方」など、文字学習の原理・原則を「書写のかぎ」としてわかりやすく示し、系統的に配列されている。また、表紙裏の目次に小学校書写での学びが分類・表記されており、該当学年では何を学ぶのかがはっきりとわかる。

2点目は、③の観点に関わる部分。5年の38ページ「文字といっしょに」では、世界の文字や俳句、古典、筆や和紙について等、様々な観点から文字文化に触れ、手で文字を書く良さや学ぶ意欲を高める内容が、全学年に掲載されている。

3点目は、⑤の観点に関わる部分。2年6ページでは、硬筆学習の一番の基本である鉛筆の正しい持ち方や紙の押さえ方のイラストが、1・2年生において実寸大で、かつ右利き・左利きともに記載されている。このことにより、児童自身が実際に教科書の上に手を置いて、自分の鉛筆の持ち方や紙の押さえ方を確かめることができるよう工夫されている。

続いて、光村図書では、3社の中で唯一、5年37ページに47都道府県の漢字が示されている。また、全ての学年の裏表紙に6年間の書写学習の系統性を示した表を載せている。このことにより、常に学びの系統性が意識できるという良さがある。1年と3年では、それぞれ硬筆、毛筆学習の始まりとして、「スタートブック」をつけている。スタートブックでは、鉛筆や筆の持ち方や姿勢、道具の扱い方等、基本となる事項を明確に示している。6年生21ページには、6年間の書写学習の大切な要素をまとめた「書写ブック」がついてあるのも特徴のひとつである。

最後に、教育出版では、2年教科書を開いてすぐに、児童に投げかけるような

メッセージ性のある言葉が大きく書かれ、目に飛び込んでくることで、「何かな？やってみたいな」という気持ちが湧いてくる効果を感じられる。また、2年10ページでは、書いて伝え合う場面を写真入りで多く紹介しており、主体的に考え、対話的に学ぶ学習を大切にしていることがわかる。ただし、1年6ページでは、全体に写真や情報量が多く、紙面に余白が少なく、やや見づらさを感じるとともに、今、集中すべきことがわかりづらいと感じる。また、硬筆書写の一番の基本である鉛筆の持ち方のイラストが実寸大ではなく、小さいこと、左利きだとさらに小さいという点が惜しいと思う。

このようなことから、「東京書籍」が選定された。

【質 疑】

○西田委員

左利きの記載がなく苦労した経過があり、左利きの記載があるのはありがたい。特に東京書籍は大きく実寸大でイラストが掲載されていてわかりやすい。

○安倍委員

硬筆に出会う最初の部分と毛筆に出会う最初の部分を中心に見てきた。最初に出会う一番大事なことがはっきりと表されている。たくさんの方が記載されていると情報量が多すぎて、1年生や3年生では処理しきれない。これだということが示されているのが東京書籍にあると感じた。また、実寸大という話があったが、これが硬筆にも毛筆にもある。他社にも掲載されているが、書き方を示しながらという部分が大変わかりやすく、これだけ日本の文化・伝統・歴史を考えたときに毛筆というのがこれだけ魅力的だということが表されていると感じた。

【採 決】

小学校選定教科用図書「書写」は、
東京書籍「新編 新しい書写」（全員賛成） を採択することに決定

○社会

【事務局説明】

「社会」は3社の教科用図書がある。現行は、「日本文教出版」。

調査研究部会からは、「日本文教出版」が推薦され、協議会としても選定された。

現代的な課題として、環境、日本の領土、防災・安全、人権・平和等について各社とも、しっかりと取り扱われている。領土については「領土問題はない」という政府見解に基づいて記述されており、日本の東西南北の端について、写真や地図を用いて、丁寧に説明がされている。

ここからは日本文教出版と次に評価の高かった東京書籍の教科書を比較して

説明する。

図書の内容の組織、配列、分量については、東京書籍は本文6冊の合計が840ページと、他の2つに比べて100ページ近く少なく、特に、3・4年生の分量に差が見られる。また、5・6年生の教科書は分冊で構成されており、年間を見通した学習や既習事項の振り返り等で、やや不便さを感じる。日本文教出版では、3年42ページ、92ページで、「未来につなげる」という、授業時数には含まれないページも充実させ、既習事項と関連付けながら、児童が発展的な学習に主体的に取り組めるよう工夫している。

体験的・問題解決的な学習や、多様な考え方を生かす言語活動について、日本文教出版では、毎時間、児童の素朴な疑問から学習を展開し、問題を追及・解決、さらに、問題を掘り下げ、よりよい未来をつくるページへと発展的に問題解決的な学習が展開できるよう構成されていた。3年40ページ、49ページの「学び方・調べ方」のコーナーでは、発達段階に応じた内容で「話し合いの仕方」や「インタビューの仕方」等が示されており、児童の多様な考え方を生かす言語活動の展開に有効である。東京書籍では、3年42ページで、「つかむ」「調べる」「まとめる」「いかす」に「まなびかたコーナー」を設け、学習のゴールを内容に応じてわかりやすく表現できるよう工夫がされている。

表現、図表、写真等の創意工夫については、日本文教出版は、本文が、学習活動、学習内容、友達の発言の3つで構成され、読み取りやすく、見開きごとに問題解決的な学習が展開できるよう工夫されていた。3年生にも理解しやすい絵を使ったグラフや絵地図など、児童の発達段階に合わせた配慮と工夫がされている。写真資料は数も豊富で見やすく、児童に気づかせたいことが焦点化されている。3年128・129ページ、東京書籍3年118・119ページを比較するとよくわかる。東京書籍は、単元の導入部分では、3年55ページのように、児童の声による「問い」や「気づき」と、働く人の声による「話」の部分とに分けられていて、児童が学習内容をつかみやすいよう工夫されている。特に、学習のはじめに導入動画が設定されていて、児童の興味・関心を高めやすいと思う。しかし、資料や図表等の資料が全体的に小さく、また、統計資料もやや古いものがある。(5年下34ページ)

図書の内容が、家庭や地域と結びついた学習となるような工夫については、日本文教出版は近畿地方を扱った事例が多く、特に、3年96ページの「火事から人々を守る」では滋賀県栗東市の様子が単元事例として、6年58ページ「未来につなげる」では「彦根市子ども議会」が取り上げられており、親しみやすくなっている。一方、東京書籍や教育出版は関東地方や九州地方が多く、社会科の学習をはじめ3年生にとってはあまり、馴染みのない地域が多いように感じられた。

こうしたことから日本文教出版の教科書は、身近な生活と政治との関わり、SDGsとの関連など、子どもたちが自分たちの家庭や地域と結びついた学習を

主体的・発展的に行いやすいと考えられる。

このようなことから、「日本文教出版」が選定された。

【質 疑】

○安倍委員

近江八幡の教育大綱の基本理念に「ふるさとに誇りを・・・」とあり、ふるさとが好きになるように、ふるさと学習を大事にしようということで数年が経つ。そのような意味では、近畿地方や滋賀県など、自分の身近なことがどれだけ記載されているのかという視点で確認させていただいた。先日も沖島に学ぼうということで沖島の漁業と人に学ぶという取組のなかで、誰が何を語っているのかを写真まで出していただいて、その語りを見ていくと、その土地で大事にしているものをいかに全国に発信させていくのかということの説得力を感じさせていただいた。近江八幡では副読本などで身近な問題として勉強していると思うが、教科書に載るともっと誇れる。どの子どもも自分と社会をどれだけ身近な問題として感じられるのか、教材や内容によって距離感を感じながら学びに入っていくのではないか。そこの視点は大きいと感じた。

○大更委員

SDGsについてはたくさん記載されているが、日本文教出版は单元ごとに必ず「考えよう」という部分が入っている。その点からはわかりやすい。付属されているシールも子どもたちの楽しみに繋がると思う。それにより何が関わってくるのか、活動の中で見出していけるのが良い。

○安倍委員

文部科学省の「主体的・対話的で深い学び」があり、授業を見させていただくと全体に先生が説明されて指導されるどころと、皆で意見を出し合いながら考えようとするスタイルに変わることがある。人の意見を自分に取り込みながら、また自分も発信しながら理解してもらおうという対話の中に深い学びがあると思う。その絵が多いのが日本文教出版だった。実際に対話には色々なスタイルがあり、それが絵にされているので具体性があり、わかりやすいと感じた。

【採 決】

小学校選定教科用図書「社会」は、
日本文教出版「小学社会」（全員賛成） を採択することに決定

○地図

【事務局説明】

「地図」は2社の教科用図書がある。現行は、「帝国書院」。

調査研究部会からは、「帝国書院」が推薦され、協議会としても選定された。各学年の発達段階に応じた学習への対応については、どちらの地図帳も、我が

国の国土や世界の国々の地理的環境、現代社会の仕組みや働きなどを通して、広い視野から人々の社会生活が理解できるよう工夫されている。現代的な課題の取扱いについても日本の領土については、両社とも東西南北端の島の写真や説明とともに、見開きページで詳しく取り扱っている。また、日本の歴史のページでも領土の移り変わりについて資料として紹介されている。

図書の内容の組織、配列、分量については、帝国書院は、「広く見わたす地図」が特徴的で、7ページでは、地図のルールや使い方を記した「地図の世界へようこそ」と合わせて、はじめて地図を利用する3年生にとっては、わかりやすく、楽しみながら、主体的に学習に取り組めるものとする。21ページは、地図を初めて学習する3年生にとって学びやすいように、普通の地図よりも情報量を少なく、すっきりと見やすい形で示している。細かい地図については、後半に、東京書籍と同様の精度の地図が掲載されている。ここに帝国書院の工夫が見える。

表現、表記及び資料、図表、写真、さし絵などについて、東京書籍、帝国書院ともに7・8ページで、同じように地図を見た図、真上から見た図というようにことで表示されている。東京書籍の21ページ、帝国書院の35ページを比べると、東京書籍は情報量が少し多すぎると感じる。一方、帝国書院はすっきりとした感じを受ける。また東京書籍は、地図に占める文字の割合が大きく、読み取りにくさにつながっていると感じる。さらに東京書籍では、地図上に続きのページを表す記号や「ホップ↑ステップ↑マップでジャンプ↑」により、地図の情報が隠れてしまっている箇所が散見される。また、統計資料が帝国書院と比較して若干古いものがあった。例えば、帝国書院では111ページ、東京書籍では83ページの統計では、年代を比べていただくと、帝国書院の方が新しくなっている。また、帝国書院は、4年間の使用に耐えうるよう、表紙にはポリプロピレンシートが貼ってあり、丈夫な製本がされている。

最後に、帝国書院の56ページ「江戸時代の結びつき」で、京と江戸を結ぶ街道と主な宿場町が示されており、大津や彦根、安土城などとともに、北国街道などの記載もあり、歴史学習や地域学習とも関連付けた学習を展開できるようになっている。「地図マスターへの道」は関連する単元名も記載されており、教科書の学習と連動させながら、児童が主体的に学べるよう工夫がなされている。

このようなことから、「帝国書院」が選定された。

【質 疑】

○安倍委員

3年生から4年間使用するとき、3年生では字が小さいと感じるが、学年を跨いで使用するときの字の大きさや表現の仕方は何年生くらいにあわせておられるのか。

○学校教育課

帝国書院の地図帳を見たときに3年生が取り組みやすい大きさもあれば細かさもあり、両面で表記されていて良いと感じた。

○安倍委員

説明のようにあまりに多くの字が並んでいると地図より先に字が入ってくるので見づらいつと感じる。見づらいつと理解しにくい。地図は、目に飛び込んでくるときに、視覚障がいの子どもや弱視の子どもに拡大という形で補える場合と、色で飛び込んでくる場合がある。その点できれいに示されているのが帝国書院の地図だつと思う。QRコードも確認したが、示している内容が興味を引くと感じた。子どもたちがもっと知りたいという意欲をそそるきっかけになる。今、子どもが何を知りたいのかという子どもの心理や興味・関心を上手に踏まえながら掲載されていると感じた。

○大更委員

3年生の子どもたちが初めて地図を見るときに、地図記号や方位磁針の勉強をするが、基本的にどちらの地図帳にも地図の決まりや約束は掲載されている。ただ、帝国書院は字も大きく、挿絵等もありページ数もたくさん使われている。地図記号についても、簡単なイラストではあるが、それが入っている。初めて地図を見る子どもたちが楽しく日本や世界のことを勉強できる第一歩に繋がると感じた。また、まず初めの3年生の学習で何をするのかということが丁寧に書かれている。

○西田委員

2点ある。1点目は、帝国書院の広く見渡せる地図は非常に見やすいつと感じた。もっと細かい部分を見るのであればということで後ろの部分に詳しい内容が記載されているので非常にありがたいと感じた。もう1点が、初めて見させていただいたときに、なぜこれだけ表紙の質が違いつのかと感じた。地図は4年間子どもたちが使用する中でよく見るとつ思う。4年間破れたりせず使用するためにポリプロピレンシートが貼られているという工夫は大事だつと思った。

○教育長

帝国書院の最後のほうの「江戸時代の結びつき」について説明していただいたが、歴史やその時の出来事、当時の人々の暮らしと地図を横断的に見ながら情報を収集するきっかけになる地図になっている。そのようなものの考え方をしていかなければならないが、なかなか歴史と地理的なものの結びつきは難しいが、この地図帳を見るとこのようにして理解できるんだとわかる。近江八幡市としては朝鮮通信使が通つたという歴史的な事もあり、ふるさとのことを学ぼうと取り組んでいる学校もある。わかりやすい表記だつと思った。

【採 決】

小学校選定教科用図書「歴史」は、
帝国書院「楽しく学ぶ 小学生の地図帳」(全員賛成) を採択することに決定

○算数

【事務局説明】

「算数」は6社の教科用図書がある。現行は、「東京書籍」。

調査研究部会からは、「大日本図書」が推薦され、協議会としても選定された。

採択基準・観点に基づき、今求められている「主体的・対話的で深い学び」の実現や「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を可能にし、また、子どもたちにとっても先生方にとっても、わかりやすく、使いやすい教科書の採択に向けて協議していただいた。

学校図書の教科書は、唯一A B版という少し横長のサイズを採用している。机の上に、教科書・ノートそしてタブレットを出してと考えると、少し扱いにくい大きさかと思う。2年・4年・5年は他の教科書に比べ、単元数が多くなっている。

教育出版は、教科書本文に「めあて」や「まとめ」等の提示がないので、児童にとっては学習の目標やポイントがつかみにくいと思う。単元配列等については、3年下目次を見ると、「小数」よりも先に「分数」を扱っている。これは、教育出版と啓林館2社の特徴。しかし児童の思考の流れから考えると「小数」を先に扱う方がよいと考える。

啓林館は、上22ページで扱っている算数ブロックが本地域では馴染みのないものになっている。上27ページ、教科書に直接書き込むにはマスが小さい箇所がいくつかあり、気になる。

日本文教出版の教科書の魅力のひとつは、紙面がとてもきれいで見やすいところである。ただ全学年とも予備時数が少なく、特に4・5年は7時間ほどしか余裕がない。他社は15～20時間ほどの予備時数を設けている。

東京書籍の1つ目の特徴は、吹き出しや補助発問、まとめの示し方等が大変工夫されており、既習事項との統合や発展的な考察を促しながら、主体的に学びを深めていくことができるような造りになっている。2つ目の特徴は、1年生の別冊スタートブック。A4見開き1ページで、教科書の上に実際に算数ブロックを置くなどの具体的操作がしやすく、また実際に書き込んで学べるオールインワン型になっており、1年生がわくわくしながら集中して取り組める。ただ、プログラミングに特化した特設ページは4年生以上にしか設けられていない。

大日本図書の第一の特徴は、基本的に全学年年間1冊の合本となっているところである。当然教科書は少し重くなるが、一人ひとりの習熟度に合わせた学び直しや個別最適な学習がしやすく、また単元配列の入れ替えもしやすくなることは利点だと考えた。91ページにあるように、随所に用意されたデジタルコンテンツを活用する際、他社の教科書と違い、二次元コードの横にその内容が書かれているのがとても使いやすい。本文には外国にルーツを持つ子どもや車椅子にのる子どもなど、様々なキャラクターを使用し、道徳・人権上の配慮もされて

いる。第二の特徴は、個別最適な学びと協働的な学びを充実させる紙面構成になっている部分である。97ページでは、友達と対話し、多様な考えを引き出し、比較検討しながら問題を解決していく学習の過程を、実際の教室の写真を使いながらわかりやすく示している。98ページ「確かめ問題」では、まず基礎基本を「しっかりチェック」で確認した後、適用問題に取り組む。適用問題は、必要最小限のものを水色で示し、学習が遅れがちになる児童が選択してできるようになっている。それから再度、数学的な見方・考え方について振り返りを行い、最後は「学んだことを生かそう」で批判的思考力を高める問題で締めくくっている。100ページのプログラミング教材についても全学年で設定されている。

このようなことから、「大日本図書」が選定されました。

【質 疑】

○大更委員

デジタルコンテンツの数はどのくらいあるのか。

○学校教育課

東京書籍、大日本図書共に1,450程度ある。

○安倍委員

算数・数学が嫌いな子どもは中学校に多いと感じている。分かるというのはすごく感動する。授業を見せていただいたときに、縦に記載されているのは理解しにくく、横になるとわかりやすいと言う子どもがいた。各社、それぞれ見せていただいて、後は分かる授業をしていただくことが大事だと感じた。算数が好きになるのは1年生で考えると、大きく表している、見ていて学びたいと感じる前に興味や関心が湧いてくる、見てみたい、面白いということがあると思う。子どもたちの興味や関心をどのように引き出していくのかということがはっきりと表れている。鮮明な絵、提示、数に対して一番最初に出会うもの。体験をしていきながら、体験や経験が絵に表れている。

○圓山委員

つまづきがないように挿絵などでより丁寧で、低学年も自主的に勉強できそうな気がした。QRコードで読み込むとドリルに近い問題もあり、学校に来られない子ども等の自宅学習にも使っていただけるのであれば、その利用方法なども周知していただきたいと思っている。文部科学省が教科用図書検定規則に基づき、本年度の中学校用の教科書の検定において大日本図書が発行する教科書は不適合と認められた。中学校の教科書とはいえ、その状況を踏まえて採択されないところもあると思うが、その点について何か議論をされたのか。

○学校教育課

あくまでも検定本をしっかり調査した。

○西田委員

大日本図書の教科書は非常にワクワクした。

○大更委員

1年生が最初に算数に出会うときのスタートアップについては、東京書籍と大日本図書はきちんと掲載されている。いずれの教科書も黄色と白のキャラメルブロックがあり、これは地域として使っている学校が多いので、子どもたちにも教科書を見ながら、また勉強を教えるときにわかりやすく非常に良いと感じた。

○教育長

大日本図書の練習問題がいくつかある中で、苦手な子のことを考えると基本的な問題はここだと色づけて示されていると、苦手な子にとっては意欲を持ってもらえる。

○安倍委員

最後についているおもしろ問題やプラスワンは、できた人はここに進みなさいよというものがある。これが解答だけしか記載されていない。家庭学習のために解き方などの記載があれば良いと感じた。

【採 決】

小学校選定教科用図書「算数」は、
大日本図書「新版 たのしい算数」（全員賛成） を採択することに決定

○理科

【事務局説明】

「理科」は6社の教科用図書がある。現行は、「東京書籍」。

調査研究部会からは、「東京書籍」が推薦され、協議会としても選定された。

なお、信州教育出版社は見本本の送付がなかったことから、協議会の規約で調査対象外となっている。出版社に問い合わせたところ、長野県内にしか送付していないとのこと。

5年生教科書をもとに説明する。

はじめに、東京書籍。単元の配列は、滋賀の気候や自然状況に最も適したものとなっている。2・3ページには、見開きを使って5年生で学習する事柄が分野別にわかりやすくまとめられている。4・5ページには、学び方、問題解決学習の流れが説明されており、どの学年においても基本の流れは同様だが、学年があがるにつれてレベルアップするよう意識されている。6・7ページのQRコードには、動画や記録しておくためのノートが添付されている。滋賀の地域性という視点では、5年生だけでも71ページの東近江市のダム画像、155ページの大津市科学館の画像が掲載され、他の学年についても滋賀の画像の掲載があり、身近に感じるものとなっている。A4判でゆったりとし、とても見やすく、しかも、内容量としては4学年分の総ページ数が748ページとなっている。

次に、大日本図書。表紙をめくったところにアニメで条件制御の思考を、興味

を持って考えることができるようになっている。16ページの[りかのたまてばこ]で多くの知識を得ることもできるようになっているが、単元によっては、たくさんのページが、[りかのたまてばこ]で使われている感じも受けてしまう。A4判だが、資料が小さくしか掲載されていなかったり、4年生の腕の模型や実験に使うインスタントカイロなど、学年の実験に使用している教材教具で、児童に扱いづらかったりするのではないかと思われるものもあった。滋賀の画像については、掲載されていなかった。

次に、学校図書。2・3ページには、この学年で学ぶ事の概要がまとめられている。2ページの下植物準備カレンダーは参考になる。一方、問題解決の過程での児童の思考の流れを考えると、紙面の使い方で、28ページのように、問題、実験、結果、考察が見開きの2ページに掲載されている箇所が多くみられ、良くないと感じた。また、振り子の単元を学年のはじめに扱っているが、条件制御しながら実験を進めたり、考察をしたりする力をつけてから、後半で扱うのが適切かと感じた。画像イラストが豊富だが、33ページのように、キャラクターからの吹き出しがかなり多く感じられたり、文字サイズが小さく感じられた。滋賀の画像の使用はなかった。

次に、教育出版。3ページには、前学年での学習内容がコンパクトにまとめられ、振り返りには良いものとなっている。また、大切なキーワードには、黄色の網がけがしてあり、とてもわかりやすくなっている。大日本図書と同様、63ページのように、キャラクターの吹き出しが多用されており、子どもたちの思考の広がり限定される事もあるのではないかと感じた。滋賀の画像については、6年198ページにびわこフローティングスクールの画像が掲載されている。

最後に、啓林館。2・3ページには、理科の学びをサイクル的に紹介してあり、子どもたちの思考が常に新しい疑問へとつながり、どんどん迫っていく形に近いと思った。7ページには、[理科の季節ごよみ]として教材に使用する栽培植物の年間見通しが示してある。滋賀の地域性としては、3年生と6年生に守山、長浜、近江八幡、琵琶湖博物館の画像の掲載があった。

このようなことから、「東京書籍」が選定された。

【質 疑】

○大更委員

東京書籍については、たくさんの文字や情報があるにしても、余裕があるように見えてわかりやすいと感じた。めだかの部分のノートの振り返りなどは子どもたちにとってとても参考になる。

○安倍委員

1・2年生の生活から理科へどのように繋いでいくのか。東京書籍の「不思議だな」「知るために詳しく調べたい」「確認したい・確かめたい」ということが、取っ掛かりからワクワク感があり、「なんで」という投げかけがされている。「な

んで」から「不思議」「気づき」、わかったときの喜びと最初に言ったことをどのように深めていくのかということが、道を開いていくように描かれていると感じた。理科が好きだと思える出会いがあると感じた。

○西田委員

東京書籍の裏表紙の目次が非常に分かりやすいと感じた。学ぶ部分と調べ方を身に付ける部分とが分かれてあるというのが良いと感じた。そこから内容を見ていくと具体的に記載されている。

○圓山委員

本の大きさ、絵の大きさ、「調べたい」、「やってみたい」という、子どものやる気を引き出すような演出があると感じた。

【採 決】

小学校選定教科用図書「理科」は、
東京書籍「新編 新しい理科」（全員賛成） を採択することに決定

○生活

【事務局説明】

生活科は7社の教科用図書がある。現行は、「東京書籍」。

調査研究部会からは、「東京書籍」が推薦され、協議会としても選定された。

こちら、信州教育出版社からの見本の送付がなかったことから、協議会の規約で調査対象外となっている。

6社の教科書を比較検討すると、うち3社の教科書が他と比較して、見劣りする結果となった。具体的には、大日本図書、学校図書、光村図書の3つ。

これら3社は、1年生の入門期の学習での文字数が多いことや写真にある子どもの表情が他社に比べて固い、漢字の表記が出てくる時期が、他の教科書より早いことが気になった。「いきもの大すき」の単元では、ウサギ、ニワトリ、アヒル等が扱われており、地域の実態を考えると取り扱いが難しいと思われる。このようなことから、3社の教科書を候補から外し、相対的に評価の高かった残りの3社、教育出版、啓林館、東京書籍に候補を絞った。

教育出版は、全編にわたり、上46ページのように、「きづく」「かんがえる」「ちょうせんする」等の各時間で付けたい力や活動内容が分かりやすく示されている。写真によって、その単元でどのようなことを学ぶのか児童がイメージしやすい紙面構成になっている。また、上下巻ともに、「はってん」として、社会科へのまど、理科へのまどが書かれている。気になる点は、上巻において、上57ページのように、他社では発展的学習の扱いである小動物を扱う学習を、教育出版社は本単元として構成している点。このことは、地域性を考えると取り扱いが難しいことが想定される。

啓林館の良い点としては、他教科とのつながりを意識した活動例（上31ペー

ジ、下69ページ)が多く示されている。各単元導入の小見出し部分では、「どんなところに いるかな?」「何が変わったかな?」など、児童に気づきを促す発問がたくさん記載されている。単元ごとに、下97ページのように、「できるかなできたかな」の振り返りページを設けている。気になる点としては、教科書の大きさが他社に比べて一回り小さいこと。先ほどの教育出版と同様に、児童の考えを教科書に直接書き込むスタイルをとっているが、このことは1年生の児童にとってはマス目もなく難しいと思われる。

最後に、東京書籍。子どもたちが、主体的、対話的に学ぶための工夫として、上67ページのように、活動を行うにあたっての約束事を絵のみで示し、何に気を付ければよいのか、児童の言葉で説明させ、考えさせることができる紙面構成となっている点や、児童が思わず取り組みたくなるような、目的を明確にした様々な活動が用意されている。例えば、夏に水遊びを楽しむ活動では、どんなことができるのか、上45ページのように、水遊びの例がたくさん掲載されている。地域性から見ても、各単元が季節や地域の特徴に基づいて構成され、写真によってその単元でどのようなことを学ぶのか児童がイメージしやすい構成であり、配列や取り扱う内容(例えば、生き物を扱う単元では、ウサギやアヒルではなく、モンシロチョウやダンゴムシ)が第3地区の学校に適していると考える。

このようなことから、「東京書籍」が選定された。

【質 疑】

○安倍委員

就学前の子どもは幼稚園の子もいれば保育所、こども園の子どももあり、場所によっては体験やスタイルが異なる。振り返るときにそれぞれどのように体験したのかということからスタートしなければいけない。東京書籍の本は、「はじめまして どんなところかな」と学校を見るときに幼稚園や保育所、こども園はどんなところだったのかというところからスタートしている。その一つ一つの学びの中に幼児期の終わりまでに育ってほしい姿というのがあり、今学んでいることは就学前で言えばこのような学びだということがしっかり書かれている。今、近江八幡市が行っている接続カリキュラムというものが小学校の学びと就学前の育ってほしい力や姿がどのようにリンクされながらという部分がしっかりと表されているということは小学校の先生や就学前施設の先生が学んでいく良い接点になると感じた。このような表示の仕方はあまりない。その中で保護者がそこに気づくのであれば就学前で何が大事なのか、小学校へどのように繋がれているのかというのがはっきりとこの中に書かれている。親と子の学びの教科書だと感じた。

○教育長

教育出版も最初のほうは配慮した「ワクワクドキドキはじめの一步」となっているが、東京書籍は柔らかいタッチで写真もあり、丁寧な作りがされていると感

じた。

○大更委員

小学校に入学して最初は、いろいろなところを回ったり、使い方の勉強をしたり、学校生活の一番最初の出会いが「生活」だと思う。スタートプログラムにあるような学校生活のスタートが広がっていけばよいと思う。その次に、学校大好きということで、学校探検があり、学校にいる様々な方との出会いがある。そういう点から東京書籍は上手に繋いでいると思う。また、絵が柔らかくきれい。生活科はスタートが大事でそこに重点を置かれている。

【採 決】

小学校選定教科用図書「生活」は、
東京書籍「新編 新しい生活」（全員賛成） を採択することに決定

○音楽

【事務局説明】

「音楽」は2社の教科用図書がある。現行は、「教育芸術社」。

調査研究部会からは、「教育芸術社」が推薦され、協議会としても選定された。

両社ともに、写真やイラストなどの配置や構成に工夫が見られ、子どもの感性に訴えかける。（教育出版10ページ、教育芸術社12ページ）

両社ともに、4ページの見開きに「学習マップ」が設定され、音楽の仕組みや構成を分かりやすく提示している。また、昨今の教育課題に音楽の観点から触れたものが多く、教育出版ではSDGs（6年46ページ）や国際理解（6年38ページ）について、教育芸術社では国際理解や多文化理解（48ページ）、著作権（24ページ）についてなど、内容が工夫されている。

一方、両社を比較したときに違いが見られたのは次の点。

まず、楽器等の演奏へのスムーズな導入。鍵盤ハーモニカであれば、教育芸術社の1年生の教科書ではゆっくりとした音遊びから入っていったり（34ページ）、リコーダーでは吹き口部分だけで音を出したりする（3年21ページ）など、子どもたちが無理なく楽器に触れ、そこから自然と演奏につながるような構成になっている。

次に着目した点は、楽譜をどの段階で読んだり書いたりするかという点。教育出版社は、2年生の「かえるのがっしょう」（2年24ページ）、続いて「かっこう」（2年28ページ）でドレミの読みが出てくるが、教育芸術社では、2年生の末に五線譜を意識させた上で、3年生の最初の「ドレミで歌おう」（3年16ページ）を学習する中で五線譜の特徴や音符の書き方を丁寧に学ばせる工夫がしてあった。段階を追った楽譜との出会わせ方、スモールステップで分かりやすい点、さらに学年のつながりを見通した構成で、教育芸術社の方が優れていると感じた。

鑑賞については、教育芸術社では音色に着目しやすいように、例えば金管楽器（3年54ページ）や弦楽器のような同じ仲間の楽器の音色を聴き比べさせることで音色の違いに気づくための工夫がされていた。さらに鑑賞ノートとして書き込んで使えるような工夫もあり、どこに着目して聞くかというポイントも抑えられていた。さらに、鑑賞の中に、3年生で祭囃子を、4年生で郷土芸能、5年生で日本の民謡、6年生で世界の音楽というように系統立てている点がいやすく、分かりやすくなっている。

このようなことから、「教育芸術社」が選定された。

【質 疑】

○安倍委員

金管楽器の音を聞くために、何で伝えられるのか。補助教材やCDなどがあるのか。

○学校教育課

付いている。

○安倍委員

子どもたちがもう一度聞きたいとなった時には可能か。

○学校教育課

音楽の時間に繰り返し流して聞くことは可能。

○安倍委員

音楽は耳から入って、状況を浮かべながら口ずさんだり、感じたりと感性の一番大事な部分だと思う。ただ、教科書を通して見てみると先に視覚提示、目から入ってくる音楽がある。強調されすぎで目から入ってくることに奪われてしまい、耳から入ってこないという部分がある。その辺りは協議された際に何かあったか。

○学校教育課

協議会の中ではなかった。

○大更委員

手遊びや体を使うこともわかりやすく記述されているのは、教育芸術社だと感じた。特に3年生はリコーダーを最初に勉強するとき、タイミングもゆっくりと学び方が記載されているので配慮されていると感じた。

【採 決】

小学校選定教科用図書「音楽」は、
教育芸術社「小学校の音楽」（全員賛成） を採択することに決定

○図画工作

【事務局説明】

図画工作は2社の教科用図書がある。現行は、「日本文教出版」。

調査研究部会からは、「日本文教出版」を推薦いただき、協議会としても選定された。

まずは、題材のページでは、題材名の横や下に、図工で育みたい資質・能力の「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの観点に分けて学習のめあてが示されている。これは、その題材で何を学ぶのかが、子どもにも指導者にもわかりやすくなっている。ただ、開隆堂では3つの観点それぞれに1項目ずつのめあてを示しているのに対し、日本文教出版では「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」の観点には2項目ずつを挙げて、5項目としている。それらは評価規準につながるものとなっている。例えば、5/6年上の開隆堂32ページ、日本文教出版18ページにある糸のこを使う題材で比べると、日本文教出版の方が子どもの活動を評価する規準がわかりやすくなっている。1/2年下の開隆堂30ページ、日本文教出版20ページにある新聞紙を使う題材でも、同じことが言える。日本文教出版では、新聞紙の扱いだけでなく、新聞紙のできる形を見つけることや思いついたことをいろいろ試すこともめあてとしており、適当だと考える。

次に、鑑賞の指導については、指導計画の作成に関する配慮事項で、表現と相互の関連を図るように示している。また、鑑賞の指導の効果を高める必要がある場合には、独立して行うようにすることとしている。それを受けて、開隆堂の5/6年下の36ページの墨を使った「絵に表す」題材のあと、水墨画の鑑賞を独立した活動として配置して、関連づけて指導できるように工夫されている。日本文教出版では、5/6年下の18ページで墨を使った「絵に表す」題材の中で鑑賞の指導も入れて、一つの題材で、表現と鑑賞を往還しながら学習できるように工夫している。他の学年でも、開隆堂は鑑賞を独立して扱うことが多いのに比べ、日本文教出版では表現の指導だけでなく鑑賞も合わせて相互の関連を図るように工夫している。また、現代的な課題として、両社ともにSDGsの観点に立った題材や事例を取り上げ、自然や資源を大切にすることや、地域の伝統や文化を守るなどを取り上げている。外国の児童の作品例などを掲載することで、多文化共生の視点に立って考えながら学習できるようにも配慮している。開隆堂では、3/4年上で2021年の東京オリンピック・パラリンピック、5/6年上で人形アニメーション作品などが取り上げられているが、日本文教出版では、3/4年上と5/6年上でICTを活用のなかで情報モラルや著作権、肖像権についても説明されており、現代的な課題を指導する際に、より有効であると考ええる。

最後に、各学年の題材で扱う材料や用具について、開隆堂は絵の具の使い方から釘の打ち方、紙版画の作り方を3・4年上58ページから62ページまで、5ページに掲載している。日本文教出版では、絵の具の使い方から釘の打ち方、小刀やきり、接着剤や粘土の使い方などを3・4年下56ページから62ページまで、7ページにわたって掲載している。両社とも写真や図を使ってわかりやすく

説明しているが、日本文教出版の方がページ数も扱う用具も多く、項目や番号を用いてわかりやすいレイアウトで、より丁寧に説明されている。

このようなことから、「日本文教出版」が選定された。

【質 疑】

○大更委員

以前の図工は制作活動が中心であったが、最近は鑑賞教材が多く取り上げられている。制作して造形活動を進めるのと鑑賞を同時に進めるのが良いのではないかと思う。鑑賞については、友達の作品を鑑賞するのも良いし、芸術性のある作品を鑑賞するのも良い。造形活動と鑑賞を明確に分ける必要はないという観点から日本文教出版はより進んだ形で作られていると思う。

○安倍委員

図画工作は特に接続カリキュラムの一番接点の濃いものだと思う。就学前の体験や経験がどのように生かしていけるのか。どのような学びになっているのか。未知なる世界に出会える良い教科だと思う。また、どのような教科に繋がっているのかという部分の手入れもされている。書き溜めていくと自分だけのノートができるという提示がしてあったが、自分の図工や絵などを振り返ったときに自分がどのような道を歩んできたのかが一目瞭然で、ずっと残しておきたい自分史のような印象を受けた。

○大更委員

特に1年生の上を見ていくと、日本文教出版は自然に出ているような表情が多いという印象を受ける。子どもたちは教科書の表情で、それを見て自分もやってみたいという展開と、日常的な中に表情が明るいのは日本文教出版だと感じた

○教育長

日本文教出版に「カラフル色水」という部分があるが、金田小学校区の幼小接続カリキュラムを作成していく上でどのようなことが大事かという内容で授業をしていただいた中で、いろいろな色を子どもたちが作っていた。お店屋さんが自然に出来上がってくるという子どもたちの学びの様子を見ていた。子どもたちの接続カリキュラムに繋がると思う。子どもも指導者も学ぶことができる。本市の子どもたちにぴたりとくる題材ではないかと感じた。

【採 決】

小学校選定教科用図書「図画工作」は、
日本文教出版「図画工作」（全員賛成） を採択することに決定

○家庭

【事務局説明】

家庭科は2社の教科用図書がある。現行は、「開隆堂出版」。

調査研究部会からは、「開隆堂出版」が推薦され、協議会としても選定された。

東京書籍では、全単元ともに、体験的・問題解決的な学習を軸にしており、特に61ページ「深めよう」の学習では、学習内容を結びつけ、友だち同士交流しながら解決できるような流れになっている。また、デジタルコンテンツに思考ツールが取り入れられ、個人の考えをまとめたり、グループの考えをまとめたりするときに活用しやすくなっている。キャリア教育につながる「プロに聞く」という項目が学習の出口としてとてもふさわしくなっている。

開隆堂では、身につけさせたい内容を、20ページでは3つのステップに分け、基礎的理解を図ることができる。最終的には日常に生かせる技能を身につけることをねらった配列となっている。41ページでは、調理実習や手縫い、ミシンでの製作など手順が見開きで横流れに記されており、作業の流れも明確で、どの児童にも迷わず実習ができるものとなっている。また、5年生6年生と2年間で継続した学びができるような配列となっており、学びの定着もしやすいと考える。資料として載っている表やグラフ、さし絵については、シンプルで視覚的に分かりやすくなっている。文字のフォントもすっきりとしていて見やすく、どの児童にも読みやすいものとなっている。制作物の例が習得した技能を適切にまた魅力的に使ったものとなっており、児童の創作意欲を刺激することが期待できるところも良い点となっている。

このようなことから、「開隆堂出版」が選定された。

【質 疑】

○安倍委員

開隆堂は、今までは右利き主流だったものが左利きにも分かりやすいものになっている。両方を肯定した、どちらでも良いんだという記載になっている。男女の問題、障がいの問題、職種、老若男女、様々な角度から地域社会、生活を見つめていくということが書かれていた。最後に特別支援教育の視点から書かれている内容が大変読みやすく、人にやさしい、全体への配慮がなされた表示の仕方がされている。

○大更委員

開隆堂の方が紙が厚いと感じた。

○安倍委員

ユニバーサルデザインがこれなのかなと感じた。

○大更委員

ある程度紙の質などは決まっていると思う。

○安倍委員

特別支援教育の方に配慮されている。肢体不自由の方などは指先が弱く開かないということを想定したときに、少しの力でページがめくれる、それが配慮だ

と思う。皆で学ぶ場所に配慮されているというのが合理的配慮だと思う。

【採 決】

小学校選定教科用図書「家庭」は、
開隆堂出版「わたしたちの家庭科」（全員賛成） を採択することに決定

○保健

【事務局説明】

「保健」は6社の教科用図書がある。現行は、「東京書籍」。

調査研究部会からは、「東京書籍」が推薦され、協議会としても選定された。

東京書籍については、「けんこう」を心も体も「けんこう」な状態ととらえ、保健の学習をしていくことで元気のもとをためていくという形式で学習が進むように構成されている。5・6年1ページのように、登場人物も男女だけでなく、障がい者、健常者、外国籍の子どもも登場し、グローバルな視点を大切にしている。26ページのけがの防止の単元では、ユニバーサルデザインを例として、幅の広い駅の改札や、ホームドア、音声信号機や点字ブロックを紹介している。各単元の説明の中に「自分ならこうする・こう考える」という書き込む箇所が設けられており、自分で課題を探し・考えていくことで学習を進めていけるように作られている。

次に、成長期における個人差の問題や、現代の課題であるSNS、心の発達についての項目の「身体の成長」では、身長伸びの部分で、身長伸び方の例は個人差があることを理解するためにもたくさんの例が載っている方がいいが、6例が3社（東京書籍・大修館書店・光文書院）、4例が3社であった。東京書籍の3・4年の教科書30ページでは伸びのグラフが棒グラフと折れ線グラフが合わせて描かれており理解しやすいものとなっている。

次に、「第二次性徴」のところでは個人差というところで「初経」「精通」の始まった時期のグラフについて注目した。表に表されている年齢に達しても「初経」「精通」がない児童の存在やその不安感をできるだけ持たないような配慮を考えると15歳から19歳と幅はあるが、それ以降で経験がないという表記がされていた会社が4社（東京書籍3・4年36ページ・大修館書店3・4年33ページ・文教社3・4年26ページ・光文書院3・4年31ページ）であった。

また、性の多様性については6社ともに触れてあったが東京書籍は、体の性以外にもいろいろな性の物差しがあることや体の性・心の性・好きになる性・表現したい性などを紹介し、自分らしく生きることが大切だという表現になっている。（3・4年38ページ）

続いてSNSについて、家でのルールや姿勢の崩れ・マナーについて書かれていたのは4社、個人情報の流出やトラブルについて書かれていたのは5社であった。

最後に、心の発達について、東京書籍は心の状態による体の変化を自分に当てはめて考えさせる構成で、悩みの内容が円の大きさに分けられるなど見やすい表になっている。対処例も多く、気持ちの伝え方についてのソーシャルスキルトレーニングの例も書かれている。(5・6年17ページ)

このようなことから、「東京書籍」が選定された。

【質 疑】

○大更委員

性の多様性については、東京書籍では自分らしさをどのようなところに求めるのかがはっきりしていて良いと思う。不安や悩みがあるときの相談窓口が資料として記載されており、うまくまとめられていると思う。

○安倍委員

道徳で命との出会い、生きるとはどういうことなのか、命の粒から学んでいく、素晴らしいものに出会いながら、さらに保健の自分の心と体を見つめるという教科に入ったときに、自分はどのようにして生まれたのか、生まれたときのお父さんやお母さんの気持ちはどうなのか、ここで示してあるのが素晴らしいと感じながら見た。ここで学んだことを家でそっと見たときに振り返ることができる。そこに、お父さんやお母さんとの愛着関係を感じるができる。命を感じるこの教科が何を伝えようとしているのか、家庭生活にまで繋げている本だと感じた。そこに学びをしっかり持ってほしい。また、誰もが社会性をどのように学ぶのかというときに、ソーシャルスキルトレーニングというのはなかなか学びたくても学べない。発達障がいの子どもで一番学ばないといけないのがそこだと思う。障がいのある子どもとない子どもが共にこのスキルを学べるというのが、こんなにリアルに絵で表現している、こんなに分かりやすく記載されている。自分の課題に気づく、皆が教えてあげることができる場面に出くわすことができるというのが大変良い提示の仕方をされていると感じた。

【採 決】

小学校選定教科用図書「保健」は、
東京書籍「新しい保健」(全員賛成) を採択することに決定

○外国語

【事務局説明】

外国語は6社の教科用図書がある。現行は、「東京書籍」。

調査研究部会からは、「東京書籍」が推薦され、協議会としても選定された。

東京書籍の話す聞く言語活動については、児童が思わずやりたくなるような目的・場面・状況を伴った言語活動が年間を通して設定され、チャンツや歌、Small Talk、Enjoy Communicationで、無理なく基本的な内容からゴールの活動

へとつながるようにできている。例えば、5年生の74ページ Unit 7「日本の素敵な場所をグループで紹介しよう」という単元では、79ページにあるように、「自分たちで選んだ地方の観光案内のCMを発表する」という児童にとって魅力的なコミュニケーションが設定されている。読むこと、書くことの指導では、70ページのように、Sounds and Letters のページが各ユニットに組み込まれ、音に慣れ親しませた上で、丁寧な文字指導が段階的にできるように工夫されている。デジタルコンテンツについては、どの出版社においても、QRコードから、音声や写真、モデル映像や資料映像などが使用できるが、東京書籍は全Unitを通して豊富で質の高いデジタル教材が効果的に設定されていた。また、英語絵辞典が別冊で、伝えたい英語が探しやすく、書き写す時の手本となる。QRコードから各県や国ごとの名所や特産品、行事の写真や説明を見ることができ学習が楽しく進められる。

開隆堂は、世界各国の様々な文化や生活を紹介する魅力的なコーナーやSDGsに関連付けた内容もあったが、単元での学習内容としての取り扱いもあるとさらに良いと感じた。

三省堂は、言語活動では、1つのUnitが1学期の長いスパンで設定されており、児童が常に学期末のゴールを意識して学習することがやや難しく感じる。全体として、児童が主体的に調べたり考えたりしたことを英語で伝え合う言語活動がやや少ない。

教育出版は、12ページのように単元の初めに映像でゴールが確認できるが、紙面でも目標が児童に分かりやすいようにさらに工夫されるとよいと思う。全体的に中学校への接続を考えると文字に慣れ親しむ活動が少なく、別にワークシートの必要性を感じる。

光村図書は、読み書きの学習で中学校への接続を考えると若干物足りなさがある。現代的課題では、12か国の実際の小学生が自分の学校生活や自国の文化について話す映像があり、多様な価値観に触れることができる。英語絵辞典は取り外しができるが、単語毎の音声再生ができず、言語活動の時間の確保の妨げとなる。また、東京書籍のように5・6年で一冊にまとまっている方が、2年間で活用の幅が広がると思う。

啓林館は、5年生32ページでは、単元の初めのとびらのイラストは、情報量が多く目移りしてしまい、映像も、とびらのイラストのまま音声流れるので、ゴールのコミュニケーション活動が児童にイメージしづらく感じる。現代的な課題や世界で起きていることに興味関心が高められるような題材がもう少しあってもよいと思われる。

このようなことから、「東京書籍」が選定された。

【質 疑】

○大更委員

東京書籍については、子どもたちがしたいということやうまく学習の中に取り入れているという印象。世界と繋がるという観点で多く取り入れられている。今は書く活動が多くあるが、それを最初から丁寧に取り扱われていると感じた。

○安倍委員

英語は小さいころからやっているが、本格的に出会うのが英語の教科書。国際社会や国際交流では英語に学ぶというのは、どれほど魅力的に感じているのか。英語が好きという子どもは、最近よく耳にする。この表紙を見たときに、冒険心もあり、様々な髪の色、肌の色があるが、皆で英語を通して繋がっていきこうというものが、教科書の一番初めが物語っている。英語をなぜ学ばしていくのか、この国際交流・国際社会の時代にどのように学ばせていきこうと考えているのかという部分で会社の願いが伝わってくる。コロナ対策としてQRコードで示している配慮に驚いた。今の社会にふさわしい配慮があると感じた。家に帰って一番見る教科が英語であるとよく耳にする。その時にインターネットの使い方があり、しかもQRコードの発音や話し方など、皆で共有できる内容が示してある。示されている情報が質の高いデジタル情報がここにある。これもまさに家庭教育に繋がっていく。英語をどのように楽しんでいくのか、興味や関心の高まる内容だと感じた。

○教育長

言語活動の中で伝えあう、コミュニケーションを図るということに学力学習状況調査で重きを置いておられる。難しいという結果が出ていたが、コミュニケーションをするということが大事だと思う。東京書籍は、その入り方が良いと感じた。最初の4・5ページに自分の言葉で伝え合おうという部分があり、その中で自己紹介をしなければならないという入り方になっている。他社をみると初めから自己紹介をしようとなっており、その必要性を感じなければいけないと思う。伝え合おうという気持ちがあってはじめて自分のことを伝えることが始まると思った。構成が素晴らしいと感じた。

【採 決】

小学校選定教科用図書「外国語」は、
東京書籍「NEW HORIZON Elementary」（全員賛成） を採択することに決定

◎小学校特別支援学級教科用図書（新規選定）

【事務局説明】

知的障害学級では、通常の教科書を使用している子どもも在籍しており、より分かりやすい教科書が必要な子には、一般に出版されている本を教科用図書として使用している。一般図書を教科書として使用するには、教科用図書としての採択が必要であるため、学習指導要領の目標や内容、子どもたちの発達段階や発達の状況に即したものが選定された。

今回の選定については、来年度供給不能となった図書のある「理科」と「英語」、昨年1冊しか採択されていなかった「地図」と「家庭」、昨年採択されていなかった「図工」について1冊ずつ選定された。今回審議いただく図書は5冊。

はじめに「理科」。選定されたのは、教育画劇の「つくってまなぼう！理科のマジック3」。こちらの図書は、現在の採択本の中にある科学実験の分野（4ページ・14ページ）で、最初に結果を写真で大きく取り上げて、やってみたい気持ちを高め、そのあとで知識的な内容に触れており、学習しやすく、楽しみながら取り組めるものになっている。

次に「英語」で選定されたのは、パイ・インターナショナルの「はじめてのさがしておぼえるえいごのことば」。現在の採択本は、アルファベット中心のものと簡単な会話でのコミュニケーションができるものになっている。そこで、発達の段階に合わせて選択できるよう、アルファベットと文章の間をつなぐ、英単語中心の図書が選定された。32ページ・34ページ見開きに身近な場面での単語が集めてあり、生活場面で使える基本的な文も取り上げられている。

次に「地図」で選定されたのは、小学館の「ドラえもんにつぼんちず」。児童の発達の状況に合わせて選択できるよう、現行本の「こども日本地図」より、情報量が少ないものとし、選択の幅を広げた。（12ページ・24ページ）47都道府県の名前と形や国土の様子などがわかりやすく示されており、写真や絵も見やすく学習しやすいものとなっている。

次に「家庭科」で選定されたのは、金の星社の「おてつだいの絵本」。4ページ・6ページ・18ページをご覧いただきたい。この図書は、社会的自立を図るうえで大切な、掃除、片付け、洗濯等について、基本的な内容から段階を踏んでわかりやすく示されている。現行本が「料理」であるので、生活場面での内容のものを増やした。

最後に、「図工」で選定されたのは、ポプラ社の「はんがあそび」。4ページ・6ページ・8ページをご覧いただきたい。知的障がいのある児童にとって学習しやすい手を使っての版画から始まり、野菜や葉っぱを使う等児童の発達段階に即して活用できるようになっている。

以上5点が選定された。

【質 疑】

○安倍委員

図画工作の「はんが」について、先ほど小学校の図画工作の教科書を見ていて、様々なものに触れ、五感を通して、体験をするというのが良い学びの体験だと考えると、「はんが」に特化された内容であり、この1冊ではどうなのかなと思う。狭められてしまうと感じる。知的障がいのある子どもはもっと広げてあげてほしい。

○学校教育課

子どもたちが興味を湧いてという部分がある。手にして、肌で触れて、体感できる部分が調査の中の意見としてあった。

○安倍委員

版画の単元を見るとすごくバリエーションもあり、版画を勉強するには幅があり、深さもある。ただ、1年から6年までこの1冊となった時に親はこれを選択するのか疑問がある。

○学校教育課

もともと図画工作の特別支援学級用は無かった。それは教科用図書自体が見て楽しめる内容となっており、おそらく活用がなかったと思われる。ただ、無いのもダメなので、少しずつ増やしていこうということで選定された。これから増やしていこうとは思っているが、実際どれだけ使用するのか。教科用図書が色々見て楽しめるものであり、また図画工作は交流学級に行かれることが多く、皆と同じ教科書を持たれるというのが前提になっている。教科書以上のものとなると調査研究がなかなか大変だと思う。

○安倍委員

もう少し幅を持っていただけるとありがたい。

○教育長

図画工作の中にも様々な分野がある。総合的なものとなると非常に難しい。

○学校教育課

総合的なものとなると難しい。お絵かき手帳や塗り絵なども色々あるが、絵を描くという分野になる。工作グッズなどもたくさんあるが、1冊ですべてを網羅しているというのは、一般図書では難しいと考える。

○教育長

古い本ではあるが、まだあるということは良い本だということではないのか。

○安倍委員

子どもたちに主体的といいながら、「家庭」の本は「おてつだい」と言っている。「おてつだい」と言うと主体が保護者になる。お手伝いは大変大事ではあるが、子どもたちもお手伝いをしているとよく言うがお手伝いに学ぶというのがどうかと思う。内容は良いのになぜ「おてつだい」としたのかに疑問が残る。

○大更委員

「あそびのひろば1」となっているが、2や3もあるのか。その中で「総集編」のような、全てを総合的に網羅したものはないのか。

○安倍委員

英語はわかりやすい提示がされていると感じた。単語を知るというのは良いこと。

○教育長

会話のところまでついていけないかもしれないので、わかりやすいと思う。

【採 決】

小学校特別支援学級教科用図書

小学校3～6年「地図」は、

小学館「ドラえもんちずずかん1につぼんちず」（全員賛成） を採択することに決定

小学校3～6年「理科」は、

教育画劇「つくってまなぼう！理科のマジック3」（全員賛成） を採択することに決定

小学校1～6年「図画工作」は、

ポプラ社「あそびのひろば1はんがあそび」（全員賛成） を採択することに決定

小学校5～6年「家庭」は、

金の星社「おてつだいの絵本」（全員賛成） を採択することに決定

小学校5～6年「外国語」は、

パイ・インターナショナル「はじめての さがしておぼえるえいごのことば」（全員賛成） を採択することに決定

◎中学校特別支援学級教科用図書（新規選定）

【事務局説明】

特別支援学級中学校では、現行本が1冊だけの「地図」と「美術」について調査研究を行い、それぞれ選定していただいた。器楽も1冊であるが、器楽は検定本を使用している子どもが多いこと、教科用図書にふさわしい一般図書が見当たらないことから、選定していない。

初めに、「地図」で選定されたのは、永岡書店の「こども日本地図2023年版」。調査研究では、「学習日本地図帳」、「ジュニア地図帳こども日本の旅」と比較検討した。

3冊とも、学習指導要領に則り目標が達成でき生徒の障がいの状況に応じて発達段階に適応している。中でも「こども日本地図2023年版」は、1ページの目次、2ページの本の使い方の後に、世界遺産（6ページ）や日本の産業（18ページ）などテーマ別の資料があり、調べ学習に適している。さらに、都道府県別の名物や名所（77ページ）が1ページずつ見やすく豊富に紹介されている。これは、他の2冊にはないところ。また、大きな写真や目を引くイラストが使われているなど、生徒の興味を引きやすく評価が高かった。本の最後にはおもしろ雑学マップ（122ページ）も掲載され、魅力的な造本になっている。彦根城（7

7ページ) や信楽のたぬきなどの地域の特産物が写真で紹介されているのも、他の2冊より秀でている部分。

次に、「美術」で選定されたのは、成美堂出版の「作ってみよう！リサイクル工作68」。調査研究では、「ペットボトル・牛乳パックのかんたん工作」、「ワクワクさんのふしぎ工作」と比較検討した。

3冊とも学習指導要領に則り目標や内容に沿っているが、「作ってみよう！リサイクル工作68」は見やすさ、内容、生徒の興味・関心という点で秀でている。この本は、使う材料ごとに章立てされており、(P4【1】・P6【2】) 4ページ・6ページのように1つのテーマごとに見開きでまとめられている。そして、作品を作るときの難易度が星印で5段階に表示されていてレベルに合わせて学習が進められる。また、写真が多くイラストもカラーでわかりやすくイメージを持って作ることができる。できあがった作品を使っただけの遊び方まで写真で掲載されていて、興味・関心が湧く。巻末には道具の正しい使い方やコツが示されるなど、基礎・基本にも配慮され効果的な学習が進められる。

以上2点が選定された。

【質 疑】

○安倍委員

小学生用と記載があれば抵抗はあると思う。先生方の認識はどうなのかなと思う。障がいを持っている子どもの保護者が、中学校の子どもが小学校用の本を使用するのと言われていたことがあった。私はずっとこだわっている。ないというのはよくわかる。人権で大事にしないといけない障がい者問題が教科書にあるのかと思う。標記にこだわるということも大事だと思う。

○学校教育課

一般図書なので対象がどこにあるのかというのはわかりやすく表記されている。売ろうと思えば「小学校の自由研究に良い」などの標記はされる。文部科学省が推薦している本ではある。文部科学省の考え方は、知的障がいのある子どもについて、通常はまず通常学級で使用する教科書の適否を考える。次に一つ下の学年の教科書、その次に一般図書になる。受け取り方ではあるが、下の学年の教科書の代わりになるもので、どの教科書を選ぶのかという選択肢としては増えるのではないかと思う。

【採 決】

中学校特別支援学級教科用図書

中学校1～3年「地図」は、

永岡書店「見て、学んで、力がつく！こども日本地図2023年版」(全員賛成)

を採択することに決定

中学校1～3年「美術」は、
成美堂「作ってみよう！リサイクル工作68」（賛成多数） を採択することに
決定

【動議】

○安倍委員

「北里学区の大型分譲地にかかる就学前施設の整備について」ということで、
教育委員会において協議し、その内容を意見書として提出したいと考えている。

○教育長

ただいま委員より提案のあった「北里学区の大型分譲地にかかる就学前施設
の整備について」の意見書について、議案として取り扱うこととしてよろしいか。

○委員

異議なし

○教育長

「北里学区の大型分譲地にかかる就学前施設の整備について」の意見書につい
ては議案として取り扱うこととする。

また、当該内容は、意思決定過程における未成熟な情報であり、公開すること
で市民に不正確な理解や誤解を与え、混乱を生じさせるおそれがあるため、非公
開とすることを提案します。

○委員

異議なし

◆議第24号 「北里学区の大型分譲地にかかる就学前施設の整備について」
の意見書について（非公開）

【採 決】

議第24号 「北里学区の大型分譲地にかかる就学前施設の整備について」の
意見書について

（内容修正し、教育委員会委員確認の上、）承認

（3）閉会

教育長が8月第2回定例会の閉会を宣言